

Title	教材用品の青系統色の呼称について
Author(s)	松本, 千巻
Citation	デザイン理論. 20 P.76-P.102
Issue Date	1981-11
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52659
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

教材用品の

青系統色の呼称について

松 本 千 巻

はじめに

只今、セット式・教育用色紙を検討する作業をしているところで、昭和53年から手がけているが、まだ終結には至らない。

色紙を美術的教育の場の有用品と認め、教あるセットのセット別特性を利用者立場において確認するのがねらいである。その1パートとして、セットに付されている色紙色名の調査をした。ここでは、全般的作業のねらいをふまえながらも、新たに〈色名使用の実態把握〉という部分目標が加わった。

表題はその延長線上にのるもので、本稿独自の調査目標があるわけではない。が、とくに、青系統色・名を焦点として報告する。

複雑な色名世界に困惑さえ感じる今日である。〈青系統色を伝達するコトバとしての◆色名◆再考の一材料〉となるなら幸いである。

I. 色紙の色名表示について（色名調査概要）

1. 調査対象及び対象品の分類

色紙セットの全般的事柄を検討する際には、昭和53年度以降既販の教育用色紙21種（標準色色紙を含む）をその対象とする。が、この調査では21種中、

(1)
固有色名の表示あるもの14種を調べた。

表・1

資 料			調 査 上 の 分 類				備 考	
整理 No.	名称 (S.53 ~)	大きさ	色数	色 組 特 徴	色名の有無と種別	製品取扱所	資料名・内容などの変更 (~S.56)	
1	ト ー ナ ル (角型)16	15×15	小 数 (16) 25	基本的色(幼少用)	固有色名	A	ト ー ナ ル カ ラ ー 18色	
2	カ ラ ー ワ ー ク (角型20)					B		
3	色 研 ワ ー ク (角型)					C		
4	ト ー ナ ル (24)	B 6	}	基 本 的 色	×	A	ト ー ナ ル カ ラ ー 24色	
5	カ ラ ー ワ ー ク (基本色組)					B		
6	色 研 ワ ー ク					C		
7	色 研 ワ ー ク (中間色組)	B 6	}	中 間 色	固有色名	C		
8	カ ラ ー ワ ー ク (中間色組)					B	色組・9色入れかえ	
9	標 準 色 紙 (J I S)	B 8	}	標 準 色	×	A		
10	標 準 色 紙 (P C C S)					分類色名	A	
11	ト ー ナ ル 48	B 6	中 数 (35) 69	配色演習用色	固有色名	A	ト ー ナ ル カ ラ ー 48色	
12	カ ラ ー ワ ー ク (T O N E 50)					B		
13	色 研 ワ ー ク (50色組)					C		
14	J I S 標 準 色 紙 (54)	B 6	}	資料・見本用色	×	B	J I S 規 準 色 紙 → 新 J I S 規 準 色 紙 75色に増	
15	ト ー ナ ル カ ラ ー (トーン別)65					固有色名	A	ト ー ナ ル カ ラ ー トーン別いろがみ65色
16	カ ラ ー ワ ー ク (トーン66)						B	
17	配色カード69					6×7	分類色名	A
18	チェッカーカラー89	B 6	多 数 (89) 100	実 験 用 色	×	A		
19	コーディネートCOLOR90					C		
20	配色カード 98 b	12×17.5	}	配色演習用色	固有色名	A		
21	配色カード 100	B 6				見本・配色演習用色	B	

調査実施の便宜上、対象品を4類の規準によって分類することからはじめ、表・1のような資料便覧とした。そして、色名表示のないものは、この調査対象からはずれていく。「標準色紙」と明示の3種は、他のセットとは異質の目的のもの——と判断し、色名表示の有無にかかわらず、参考品扱いとした。21種分の命名のアウトラインを表・2にまとめたが、結局、総色枚数1031（1セット内での重複色を除く）の61%にあたる632枚（14種）に付された固有色名を当面の資料とし、調査の実施に入る。

表・2

各種セット 18種			標準色セット 3種			総計
全色数 905枚			全色数 126枚			1031枚
分類色名付	1種	69枚	分類色名付	1種	37枚	106枚
固有色名付	14	632	固有色名付	0	0	632
色名なし	3	204	色名なし	2	89	293
色名付計	15	701	色名付計	1	37	738

2. 出現色名と同名の出現頻度

632枚がどういう名で呼ばれているかを調べ、その一覧表を作成。

おーどいろ・おうどいろ・おおどいろ・

しゅいろ・朱色

のような例、さらにそれにあたる色枚数は1名1枚を残して整理した。金・銀も除いた。

イ) 全般の概況

当初の計上枚数632は実質619となり、そこに230の色名があらわれる。各色名が何セットで使われているかも調べてみた。ここで、色名別の該当色が一覧できるよう準備。通覧してみると、つぎのような矛盾をかかえていることに

表・3

A 群	8セット以上に出現の色名	18名	計 230 名
B 群	5セット以上に出現の色名 (上欄分を含む)	39	
C 群	1セットにのみ出現の色名	102	
D 群	そ の 他	89	

気付く。

- 近似色や同類色が異名で呼ばれているための色名数の増（反対例もある）
- 同じ取扱所分は、少数色組、中数色組にと、同一

の色・名があるための頻度の増一が、この場では単純に計数として処理する。結果、表・3を得た。

表のA群は出現頻度大、B群は頻度大～中、と解せるだろう。A群は有彩色名・16、無彩色名・2で、色相名並びに系統色名として知られているものが70%余を占め、有彩の主要10色は揃っている。B群では、さらに有彩色名・18、無彩色名・3が加わり、Aよりも色調の変化をうかがわせる名が多くなる。計39の色名は表・4を参照してほしい。

1セットにしかみられぬ頻度極小の色名中にも、なじみ深い名がみえるが、詳細は省略する。なお、和名、外来名の比はおよそ6：4であった。

□) 色組数別・色名について

1セットの色数は、色紙選択のメドの一つとなる。そこには、色組にふさわしい色名への期待も付随するわけだから、少・中・多数色組別での出現名特徴をみていく。

●少数色組の色名

このグループでは、のべ74名が出現。表・1にみるように、7種の資料は基本的色組のものと、中間色組のものを含んでいる。資料枚数は前者が100余、後者は約50であり、色名のあらわれかたは二分される。即ち、基本的色組には前段イ)で述べたA・B群39名中の80%⁽¹²⁾が出揃う（出現数の多少はあり）。一方中間色組での色名は、少数色組としては稀少の名が目立つ。同時に、それらの名は全色を対象とした出現頻度も小のものが多い。

しろピンク、セピア、とのこいろ、なんどねずいろ、やなぎいろ他。

●中数色組の色名

少数色組にはなく、ここに新出の名が60ある。新出名の殆んどが、このグループ内での頻度小の名である。

あおたけいろ、くりいろ、シトロン、バフ……………

など21名は、全体中の頻度も極小であった。少数色組では頻度小だが、中数色組で頻度大に変わる名もあり、それらは、さきのA・B群のものである。

中数色組の資料数は1セット48～66枚に至る5種 270余枚で、出現名は、のべ134。このグループの色組特徴（配色演習用）から察して使用層は広い。自然、色名も前グループに比べバラエティーに富む。反面、命名の随意性がみえる。

●多数色組の色名

資料2種 190余枚に対し、のべ155名が出現する。うち、このグループのみの新出名は96に及ぶ。1セットの枚数は100程度。2種ともに出現の名は30。うち、さきのグループにあったものは19名。

うめねず、カナリアいろ、コバルトブルー、スレートグレー他。

概観して、このグループでは色紙1.2枚に対し1名という具合で、中数色組の場合より一層命名の随意性が目立つ。

3. 出現色名の観察

実際色へのアプローチもしてみたので、イ)、ロ)2項について報告する。

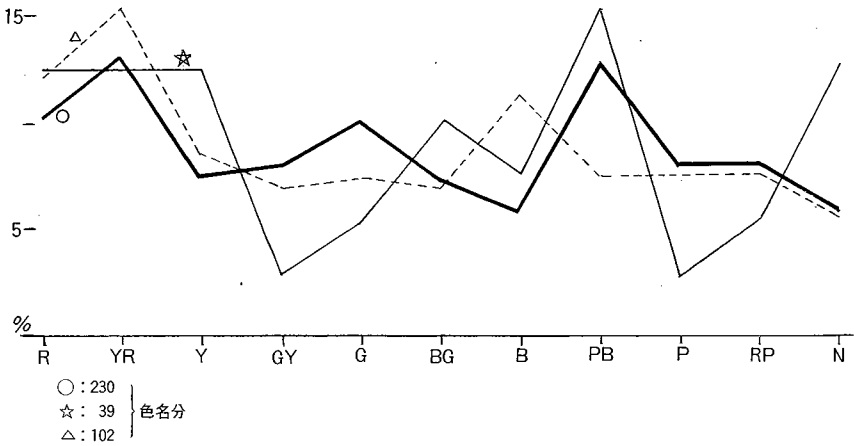
イ) 色名と色相

出現色・名を色相⁽³⁾によって分類し、色相別分布状況をみた。マンセル色相に振り、下記3類についておこなった結果を、図・Aで提示する。

○全 230名の色相別占有率⁽⁴⁾（計上数：比）

○出現頻度大～中の39名の色相別占有率（39：比）

○出現頻度極小の 102名の色相別占有率（計上数：比）

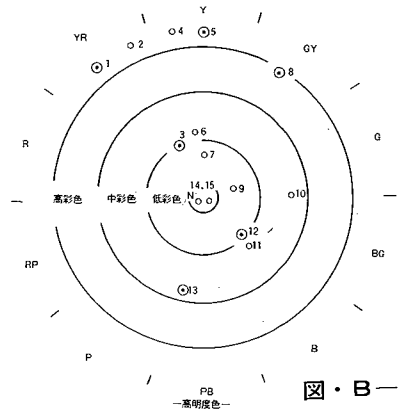


図・A

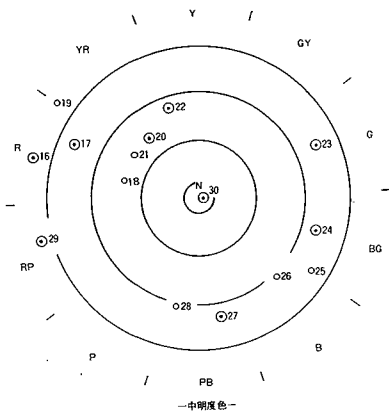
図の○印△印を比見すると、色相Yのように、極小分の方が全色分を上回るものと、R Pのように全色分の方が上回るものがある。今の見地では、稀少の名が小である方が喜ばしい。その点、極小分が第2位で全色分が低位のBは、命名に流動性があることを伺わせる。反対にPBは○☆とも高位で、△は低位である。このB、PB両色相の現象は、本稿をすすめるうえで留意しておきたい。全体をならして眺めると、暖色系色名は出現度は高いのに命名に安定性がある。

□) 頻出名の色調

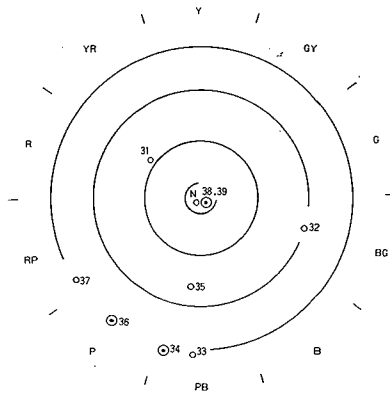
図・AのようにA・B群39名の色相別分布はPB系名が第1位となった。ひき続いて、39色・名の明彩度の判別をし、図・B 1～3のように位置づけた。図の数字と表・4のNo、数字を一致させて、



図・B-1



図・B-2



図・B-3

表・4

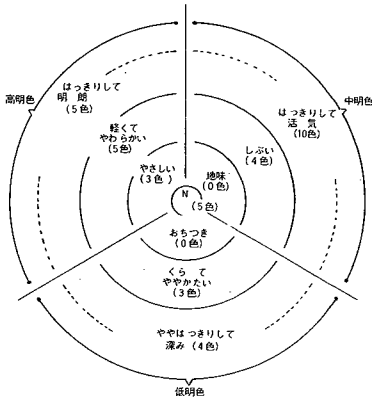
No.	高 明 度 色		
1	だ い だ い ⑨	6	ク リ ー ム ⑥
2	や ま ぶ き い ろ ⑤	7	う す き ⑤
3	は だ い ろ ⑨	8	き み ど り ⑨
4	き だ い だ い ⑥	9	う ら は い ろ ⑤
5	き い ろ ⑪	10	わ か た け い ろ ⑤
11	う す あ お ⑦	12	み ず い ろ ⑪
13	ふ じ い ろ ⑨	14	し ろ ⑥
15	あ か る い は い ろ ⑥		

No.	中 明 度 色		
16	あ か ⑪	21	レ ン ガ い ろ ⑤
17	も も い ろ ⑩	22	お ー ど い ろ ⑨
18	オ ー ル ド ロ ー ズ ⑤	23	み ど り ⑩
19	し ゆ い ろ ⑥	24	あ お み ど り ⑧
20	ち ゃ い ろ ⑩	25	み ど り あ お ⑥
26	あ さ ぎ い ろ ⑦	27	あ お ⑨
28	ふ じ む ら さ き ⑤	29	あ か む ら さ き ⑧
30	は い い ろ ⑪		

No.	低 明 度 色		
31	あ ず き い ろ ⑤	34	あ お む ら さ き ⑧
32	こ い あ お み ど り ⑤	35	こ ん い ろ ⑦
33	る り い ろ ⑤	36	む ら さ き ⑩
37	ぼ た ん い ろ ⑤	38	く ら い は い ろ ⑥
39	く ろ ⑪		

※ No. は図・Bの数字と一致

⑤は出現頻度数。図・B◎は出現頻度⑧以上。



図・B-4

色名が見とれるようにした。なお、明度を3分別してしるしたので、当該明度と彩度の程度をみていけば、およその色調が推定でき、色名に託された色イメージも浮かんでくる。図・B4はそのまとめである。

Ⅱ．固有色名見なおしの動向

さて、色彩の世界もシステマティックになって、その呼び方さえ規格化されている時代であるが、一方では固有色名見なおしの動きがある。

色彩教育の研究団体、色彩教育研究会では、昭和50年の前後、色名関係の件で二つの目立つ活動⁽⁵⁾をしている。一つは、色名研究の分科会⁽⁶⁾をもち、色名の調査・研究をおこなっていること。もう一つは、51年、文部省に色彩教育についての意見具申をしていること。具申書中、「Ⅱ・色彩教育の内容」に主事項四つをあげ、うち一項に、「色名の理解と適切な使用」を入れている。全四項は、「Ⅲ・内容の取り扱いについて」の中で、再度意見開陳されているが、「色名の理解……」の段において、基本色名、系統色名のこと、と並び、主なる固有色名14の具体名を示している。さきの色名研究会は、日本色彩研究所と共同で研究を推進させ、52年夏、その成果を「色彩教育上の色名指針」として発表した。同時にそのデータ集も公開した。従来の色彩教育では忘却されていたかのような固有色名を、知り、使える教育を要望する姿勢の一端がうかがえるのである。

私見では、種々の色名分類→系統化のすすめが混線して、一般レベルにはストレートに浸透しにくく、却って従来の固有色名の長所を侵害している面もみ

える。固有色名と分類色名の相互関与が、わかりにくい名を生み出すことになったり、日本調のわかりやすく情緒深い名がゆがめられたりする。

外来名の自在なる使用も、複雑さを助長している。

さて、Ⅰ章に記した調査は、計数と比色をくりかえす面倒な仕事であったし色名の混線ぶりを嘆きもしているが、固有色名おのおのには深い興味がある。一面で興味、他の一面では色名整理への期待が絡まり合ううち、主なる色系統の色名をも少し具体的に観察する——という方向づけを得た。ここに紹介した色彩教育研究会の動きを見聞した直後でもあり、やはり、教育的側面からそれをおこなうことになる。色名の理解などは、自然に任せられる部分が多いが、初級度段階での適切な示唆も必要であろう。コミュニケーション言語としての役割十分な色名を身につけることが、色への関心を増加させる——ものとも考えるから。以下、青系統色名について述べる。

Ⅲ. 青系統の色と色名

1. 色名と青系統色

今日、みどりとあおは別色としてとらえられている。むらさきも同様。幼児期からそのように教えられ、それぞれに色名としても定着している。中間のあおみどりやあおむらさきをも画然としようとする。ところが日本の文学ないしは文化史にみる—あお—は、それを色名としてだけみてもかなり抽象的で〈含むところの多い〉名である。古来の〈染色〉色名として、—青—はそのものズバリでみつけにくい。

日本色名大鑑(上村・山崎氏)⁽⁸⁾では、計82色が赤橙、茶、黄、緑、青、紫、黒鼠系統の7系に分別されているが、単純に青の字のつく、即ち紺青、群青などの色名を求めるなら5種。解説文中の参考名を含み10数種で、それらの半数以上は緑系統の中に包含される。—青—は、緑、縹の関連色名としてあがってくる。他の専門書(三浦氏)⁽⁸⁾の色の和名の章では、赤、橙、黄、緑、青、紫、

灰系と、やはり7系の青系のうちに一青一があるものの、固有名としての一青一の解説は判然としない。つまりは、〈判然としない〉のがぐっと古い日本の一青一だともいわれる。

今日でも、みどりもおおむらさきも包括した「アオイ」という表現は日常的な慣習としてある。今世紀に入り、色彩の体系づけにはじまった色彩研究は、現代科学や産業と手をたずさえて色の利用論から表示の規格化に至る、多彩、活発な動きをみせたし、我が国の色彩教育も、おしなべて、青はあおいろであり、ブルーとグリーンがちがうように、あおいろとみずいろもまたちがう色であることを強調する。色彩が組織化されていく中でも、色名は色彩体系の中の限られた青色群をのりこえて、青のよび名を伝承している。当然、青系統の色名は今日いう緑系統の色や紫系統の色も関与してくる。そこには色相上の青範囲を、色名との対応で区切っていく問題があるし、おなじ青系統でもさらに、スカイ、青、紺の群別がされている——のを理解しておかねばならない。

2. 色域と色名

さきの色紙色名では、青系統は和・外来名あわせて30余名とみていた。少々疑惑もあったので、改めて色域と色名の関係を整理し直す。

イ) 青の色域

まず、今日のおおいろの概念をはっきりさせた。

風土・国民性、時代、個人別のおおの知覚には差異がある。

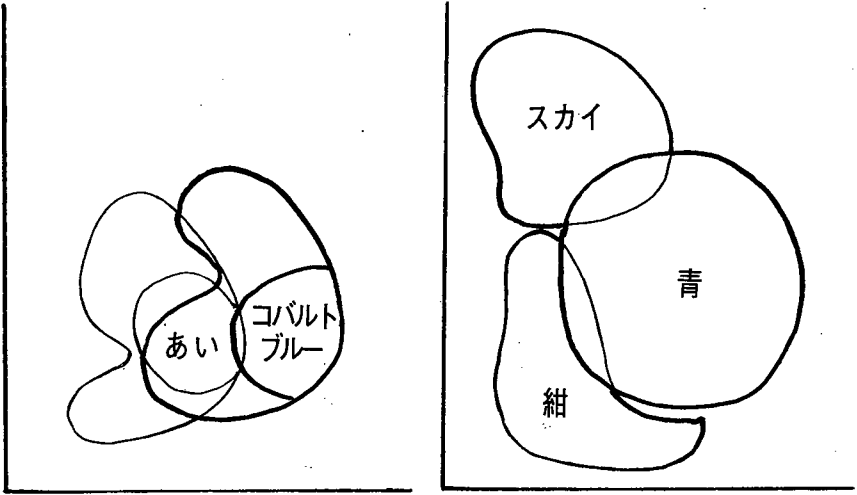
人工色の場合の一素材や発色性能がもたらすおおそのものの変容—もその知覚に影響を与える。

という事実を基盤にし、そこからつぎのようなおおいろを求めたのである。

① 諸条件下に共通かつ集約的なおお

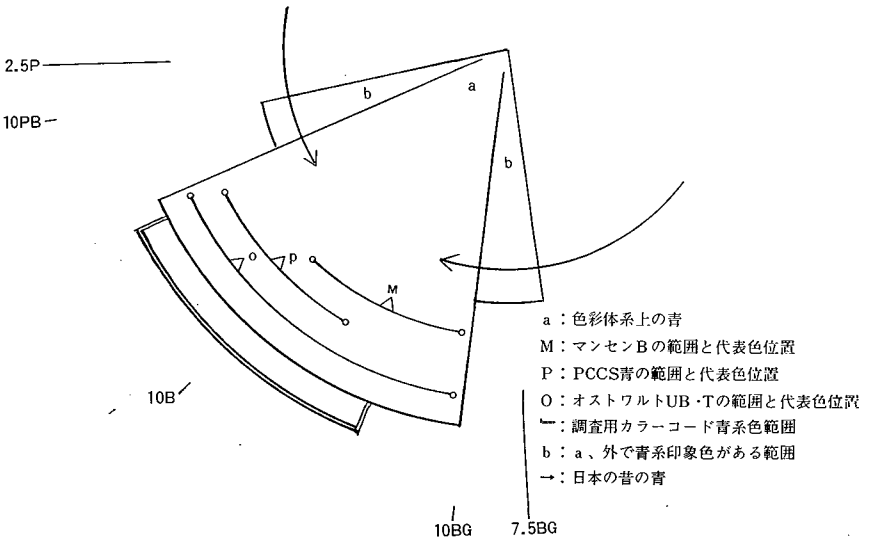
② いかにもおおというイメージの顕著なものと、そこにもおおを認めるという傍系的なおお

その際、図・C 1～3 を役立てたので参考として提示しておく。



図・C—1 昔の青・現代の青

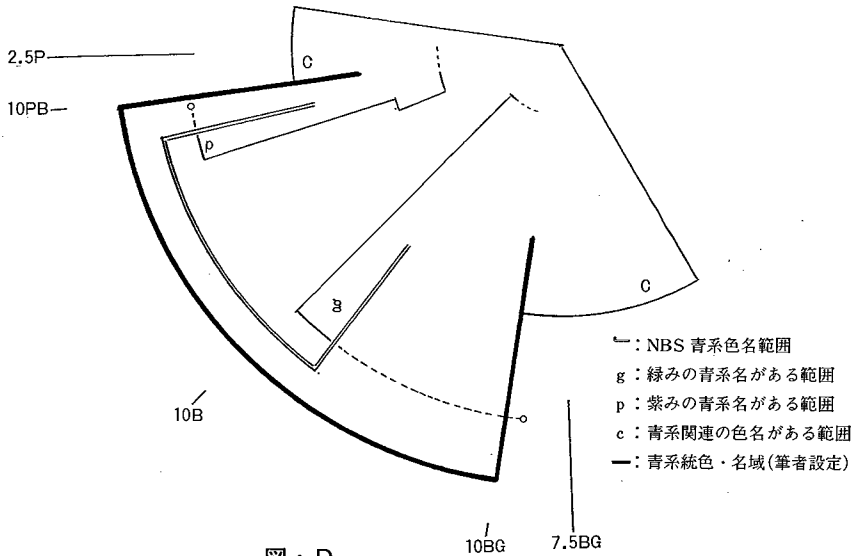
図・C—2 現代の系統別分類



図・C—3

ロ) 青系統名の範囲

ついで、⁽⁹⁾ ㉔㉕に対応する今日的色名の生成ぶりを検討した。図・Dで示す。



図・D

そして、結局はその図上に太線であらわしたような

「日本人感覚による現代の一般的な青系統名」

の範囲を再認識したわけである。

ハ) 色紙に出現する青系統名

青系統とみていた色紙の30余名を図・Dでの設定に基づいて再調査。他に青系統周辺部のものも改めてみた。結果、資料色名 230のうち、表・5の40名を青系統の名として選別した。なお、緑みの色（なんどいろとゴブランブルー）紫みの色（ラベンダー）は、青系統名としての思考も可と判断。設定線の範囲外に、青系統の一固有名の由来—につながる名がいくつか残り、そこに、色の連続性とか日本の旧来の青概念の反映を伺った次第である。

あさぎいろ みずいろ	あ こんいろ うすあ るりいろ	あ おむらさき ふじいろ お ふじむらさき		あ い いろ あおねずみいろ あかるいあ うすはなだいろ こいあいろ コバルトブルー サルビアブルー シアンプル スモークブルー そらいろ つゆくさいろ ネイビーブルー るりねずいろ	う す あ お む ら さ き き よ う い ろ	あ い な ん ど マ リ ン ブ ル	う す あ い し こ ん い ろ う す み ず い ろ は な こ ん い ろ サ ッ ク ス ブ ル ー バ ル フ ラ ワ ー さ び な ん ど ス カ イ グ レ ー セ ル リ ア ン ブ ル ー な ん ど い ろ は な だ い ろ ベ ビ ー ブ ル ー	
みどりみの 青	青	むらさきみの 青	みどりみの 青	青	むらさきみの 青	みどりみの 青	青	むらさきみの 青
全色中での頻度 大～中			全色中での頻度 やや小			全色中での頻度 極小		

表・5

二) 異名の近似・同類色

それにしても、多数の色が存在すると、近似・同類の色を異名で呼ぶ。いま色紙の中での頻度大～中となった名、うすあお・あお・こんいろの3名に限ってみても、3名それぞれに近似・同類の色の名、5～7種があがってくるし、さらにそれらの異名ないし呼びかえ名も加えるなら、別に9～10種名を数える。表・5のうちに例を拾っていても

うすあおと、みずいろ、そらいろ、うすみずいろ

あおと、こいあいろ、コバルトブルー

こんいろと、ネイビーブルー、あいろ

など、3～4種名で呼び違えられている。その実際色（色紙の）の外見はよく似ており、色名レベルでの簡明な色わけなら同一名でも呼べる。さらに例・うすあおの列にある、そらいろの近似・同類色・名、また呼びかえの名に、ベビーブルー、スカイグレーがあって、この2名とうすあおとのつながりは十分である。しかし、

○こまやかな人間心理が、おのずから、そらいろとみずいろのいいわけを要求する。

○分類名的なうすあおを採用するか、愛用の慣用名をとるか。

○和名か外来名か

ということになれば、使用名選択の意思は、何人といえど全く自由なのである。

IV. 教材用品にみる青系統色・名

＝品種別の調査＝

1. 少数色組中の青系統色・名

教材としての色材料に色名表示があれば、色と名の結合で印象づけられるから、色名の理解、記憶という点では有用である。そういう材料の青系統色の色名表示がどうなっているか？まず幼少・児童向き用品〈少数の色・名〉を主対象として確かめてみた。図・Eの色名No. 1～13までの名が出現したのだが、それぞれの材料内訳はつぎのようである。概算して、青系統色は有彩色中の20%内外⁽¹⁰⁾を占めており、その実数37が資料となった。

[a]パス 16色組 (D社) の2色・名——有彩, 13色中

[b]水彩えのぐ 12色組 (D社) の2色・名——有彩, 10色中

[c]水彩えのぐ 18色組 (D社) の4色・名 (2色は[b]と同色・名) ——有彩
16色中

[d]色鉛筆 12色組 (E社) の2色・名——有彩, 10色中

[e]色画用紙⁽¹¹⁾ (A社) の5色・名

[f]色紙 { A ①16色組 } (A社) の { 3色・名——有彩, 14色中
②24色組 } の { 7色・名——有彩, 19色中
B ③20色組 } (B社) の { 4色・名——有彩, 17色中
④25色組 } の { 4色・名——有彩, 23色中
C ⑤20色組 (C社) の4色・名——有彩, 17色中

色名指針	a	b	c	d	e	f					
	パ ス	え の ぐ	色 鉛 筆	色 画 用 紙	色 紙						
					A ① ①①	B ② ②②	C ③				
Co	Co	Co		B					1	あ	お
	Pa			Li					2	み	ずいろ
									3	う	すあお
									4	あ	おむらさき
		Pr							5	あ	いいろ
N									6	こ	んいろ
									7	う	すみずいろ
U									8	ぐ	んじょう
		U							9	セルリアン	ブルー
		Ce							10	あ	さぎいろ
									11	う	すはなだいろ
									12	あ	かるいあお
La									13	ふ	じいろ
									14	は	いあお
S									15	そ	らいろ

*Co : COBALT B. B : BLUE Pa : PALE B.
 Li : LIGHT B. Pr : PRUSSIAN B.
 U : ULTRAMARINE Ce : CERULEAN B.
 N : NAVY B. La : LAVENDER
 S : SKY B. (表示の対応名を示す)

図・E

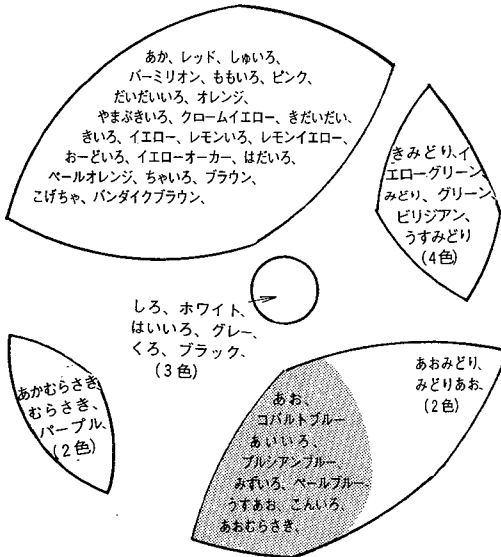
図・Eにあらわれた限りでは、誰もが用いる品を通じて、あお、みずいろは理解、記憶が徹底する色・名と思えるし、大人の助言によって英綴りのコバルトブルーも知れる。えのぐ名には顔料特有の呼び名が色名として明示される。その図の左端欄にあげたのは、II章でふれた、色彩教育研究会の提案、色彩教育上の色名指針のものである。ここに参考として引用する。

当欄の分は指針中、小学校、中・高学年段階用とされた全45色（幼稚園から小学校低学年段階用〈30色〉を含む）中のものである。青系統にそらいろ、はいあおの名があるので、色名欄中⁽¹²⁾にそれを加えた。

2. 色名認識の可能性

ついで、図・Eにもとづいて、常用品を媒介とする〈色名の理解や記憶の可能性〉を推量してみる。図・Gでは、青系統以外のものも示したが、これらの

5 Y



5 PB

図・G

色名は下記から抽出した。

[a]バス, [b]えのぐ, 20色以内の色紙①②③。ここに出現の全30色の位置づけ(色相と彩度)をしたのち, 暖・寒などの群別(色相主体)で, 出現色外周を○で囲み表わした。文字は, 各用品に表示の対応英名(カナに置きかえ)も加えてある。暖色群の色・名(13色・23名)と比べ, 寒色群は色数8で前者の61.5%, 色名数11で48%となる。うち, 青系統6色については, 9名を認識の可能性ある名とみる。

これは, 他の生活環境からの影響ぬきでの推量であり, 実際には幼少児・児童が知る色名はかなりの数であろう。認識し, 記憶したとして, その定着性は如何?と考へてみる時, またしても〈一般的なよい呼び名〉のことを思う。このことに関しては, 〈色名・知悉度〉を調べた結果があるので後述する。

3. 中数色組中の青系統色・名

児童・生徒向き用品をみたのであるが, 少数色組で確かめた用品は継続使用するものがあるので, 色紙中数色組を新たな対象とした。材料内訳は次記5セット内の61色。

[g]色紙	A'	②148色組	(A社)	の	9色・名——有彩, 43色中	
		③165色組		の	14色・名——有彩, 60色中	
	B'	②250色組	(B社)	の	12色・名——有彩, 46色中	
		③266色組		の	15色・名——有彩, 61色中	
	C'		③250色組	(C社)	の	11色・名——有彩, 46色中

ここには, 図・FのNo.1~13(-2)と15~32の計29名が出現した。これのA'B'C'と図・EのABCは同系列所の品なので, それぞれに色組数による青系統色の選び方が比較できる。また, No.1~13の色名は図・Eと同一であるから, 中数色組に至ってあさぎいろ, ふじいろが増となる様子も解る。右端欄にさきの図と同じ色名指針の名をおいた。これは, 中学校の段階用57色中のも

	色紙					R		
	A		B		C			
	21	31	22	32	23			
1	あ	お						
2	み	ず	い	ろ				
3	う	す	あ	お				
4	あ	お	む	ら	さ	V		
5	あ	い	い	ろ		Pr		
6	こ	ん	い	ろ				
7	う	す	み	ず	い	ろ		
8	ぐ	ん	じ	ょう				
9	セル	ア	ン	ブ	ル			
10	あ	さ	ぎ	い	ろ			
11	う	す	は	な	だ	い	ろ	
12	あ	か	る	い	あ	お		
13	ふ	じ	い	ろ				
14	は	い	あ	お				
15	そ	ら	い	ろ				
16	ふ	じ	む	ら	さ	き		
17	ラ	ベ	ン	ダ	マ			
18	あ	お	み	の	は	い	ろ	
19	る	り	ね	ず	い	ろ		
20	ふ	じ	な	ん	ど			
21	る	り	い	ろ				
22	ネ	イ	ビ	ー	ブ	ル		
23	あ	お	ね	ず	み	い	ろ	
24	な	ん	ど	ね	ず	い	ろ	
25	に	ぶ	あ	お	む	ら	さ	き
26	う	す	あ	お	む	ら	さ	き
27	つ	ゆ	く	さ	い	ろ		
28	こ	い	あ	い	い	ろ		
29	き	ぎ	ょう	い	ろ			
30	は	な	だ	い	ろ			
31	ス	カ	イ	グ	レ			
32	サル	ビ	ア	ブ	ル			
33	シ	ア	ン	ブ	ル			
34	う	す	あ	い				
	V :VIOLET Pr :PRUSSIAN B.							

図・F

の。

4. 一般向き用品の青系統色・名

多数色組の色紙は、高学齢者用、専門の学習・研究用、また一般用としてその利用範囲が広い。そういう場では、ポスターカラーや油えのぐなどの用品も加わってくるので、色数の多少にこだわらず、それらの青系統名を概観した。材料は6種8品である。

- | | | |
|-----|---|--|
| h色紙 | } | A ^㉑ 98色組 (A社) の16色・名
——有彩, 89色中 |
| | | B ^㉒ 100色組 (B社) の16色・名
——有彩, 94色中 |

この2セットでは、出現の青系統名が有彩色中の17~18%を占め、図・F以外の新出名は9名。

さびなど、しこんいろ、はなこんいろ
コバルトブルー、ゴブランブルー、サックスブルー、スモークブルー、ベビーブルー、マリブルー

などがそれで、㉒は青系統16色中7名が外来名になっている。

つぎのは、いわゆる描画・塗色材料ばかりである。

- | | | |
|-------|---|----------------------------|
| i | } | (13) 水彩えのぐ 18色組 (F社) の3色・名 |
| (REF) | | ——有彩, 16色中 |

[j] } ポスターカラー } 12色組 (G社) の2色・名——有彩, 10色中
 [k] } 〈スクールセット〉 } 18色組 (G社) の4色・名——有彩, 16色中

[l]油えのぐ }
 〈E O C〉 } 12色組 (H社) の1色・名——有彩, 10色中
 Z

[m]コンテ 12色組 (H社) の2色・名——有彩, 9色中

[n]スクリーン }
 印刷用インク } (I社) の5色・名

(用途: 紙・ビニール他)

[i]~[l]の描画材料は一般的色数のセット。色名は顔料名が示される。この4品に共通の名、コバルトブルーは、水彩、油えのぐでは〈チント〉である。他に青色顔料として周知のセルリアンブルー、プルシアンブルー、コンポーズブルーの計4名が出現するが、ウルトラマリンブルーの名はない。

[i]でコバルトブルー〈チント〉とプルシアンブルー、¹³⁾[k]でコンポーズブルーとセルリアンブルーの、なまの色の外見が相似しているから、これを他用品の色名に転じると、同類色異名ということになってしまう。[m]はプルシアンブルー(＃1・にぶくてはなだ色程度)とブルーグレーがあるものの、スティックには、105, 088のように番号表示。

[n]には浅葱、並浅葱、青、ミロリーブルー青、群青の5名。商品名称、並浅葱の外見は、慣用名のセルリアンブルー、ミロリーブルー青はアイ色に相当する。

V. 色名への接触及びその定着性

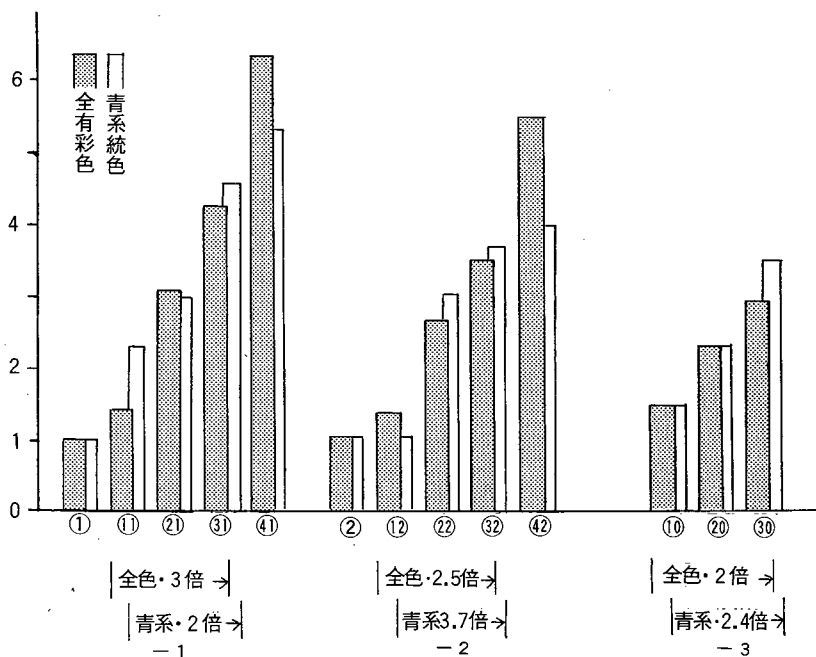
色名への接触は、生活上の日常事であるのだが、本稿の趣旨に従ってこの稿も教材用品を通じての問題とする。さらに前章でも焦点とした、義務教育学齡期の範囲で思考していくものである。

1. 色名との接触

この項イ)は、色紙色名を主例とする。1人が1セット使用の際は、25色組なら、その数だけの名に出会うことになる。ここでは、同一取扱所の品種を少数色組～中数色組へと、順次継続使用するという設定で述べるものであり、義務教育学齢期の使用が予想される色組のものを対応させた。ロ)は、既出の調査結果を手がかりとしたものである。

イ) 接触の度合いについて

はじめに、色組別の有彩全色の加増状況を調べる。図・H 1・2がそれで、固有色名付きでかつ少数色組から多数色組までそろう2社分、前掲の①⑪⑲⑳㉑㉒㉓㉔と②⑬⑭⑮⑯㉔㉕を用いたものである。うち⑪～⑳, ⑬～⑳を小学校低学年から中学校用に対応する品種とした。



図・H

図の縦軸1は、両社が幼少向きとする①②それぞれの有彩色名数を当て、それにはじまる倍数として示してある。青系統名も同じ扱いで併記したので、全色に対する青系統のあらわれ方も把握できる。

さて、⑪～⑳を順次継続使用という設定でみるなら、㉑に至って⑪の約3倍の有彩色があらわれる。単純視すれば、8～9年の経過で色名との出会いもそれ程増幅することになる。が、実際には⑪㉑に累積出現している名があるし、さらに、㉑でみる名の23%（14名）は⑪～㉑にわたって出現する。㉑の有彩60色中の62%（37名）がここでの新出名となるわけだ。継続使用ならば、累積名14の定着性は新出名より大、㉑㉑に出現の15%（9名）はそれにつぐと思われる。そして図にあらわれた色名数約3倍ということの實質は、2.4倍位に減じる。青系統の、2倍は實質1.3倍位となる。㉒～㉔を継続使用の場合も、数値こそ違え同類の状況。

以上、数をかりて述べたが、ここでの本意は別のところにある。色名との出会い度の増幅という中に一同色・名へのくり返し接触のメリットを包含して考えたいわけである。

こうして色名認識の観点から話をすすめているものの、色紙本来の効用からみれば、色名への留意の期待は微々たるものである。使用側の姿勢も色そのものとだけの接触で満足し、色名は一べつ通過の運命をたどる。中学校の段階で少なくとも前述の14名、ないしはそこに9名が加わって、それらが実際色との結合で認識されるなら色や色名への関心は深まるだろうに——と思う。それを堅固なステップとしてこそ新出の色・名への開眼もできよう。図・H3は色彩教育研究会提案の色名指針を前者と同じく扱ってみたものである。図の横軸㉕は、

⑩幼稚園～小学校低学年段階用の有彩25色名⁽¹⁴⁾

㉑小学校中学年～高学年段階用の有彩40色名

㉒中学校段階用の有彩50色名

にあたる。この場合のみ⑳㉓は⑩にはじまる倍数とした。結果は、㉓の有彩色名は⑩の2倍、青系統名は2.4倍となるが、重複名を除けば、2→1.04倍、2.4→1.4倍という実質値になる。色名指針の名は、さきの色紙色名とは別途のものなのだが、この図を分析してみるとつぎの3点が顕著である。

○⑩～㉓への重複名は㉓の色名中の48%を占める。〈㉓の場合の21%に比しぐっと高率〉

○全色の加増率と青系統名の加増率は接近している。(㉓では同率)(⑪～㉓、⑫～㉓にはばらつきがある)

○重複名48%を含む2倍という加増は、義務教育学齢に過度な数ではない。

ロ) 接触度数大の青系統名

IV章・1の調査をした結果、あお、みずいろは認識の徹底する色・名とみた。

本項前段では、くりかえし出現する色名を、記憶の定着という面でメリットあるものと主張した。いずれも、色・名融合での接触の在りようからそう判断したわけだが、既述の種々調査にあらわれた青系統名からそのような条件を備えたものを抽出・整理し、表・6で一覧できるようにした。これは次記4類を対象としたものである。

○図・E、Fから⑪～㉓、⑫～㉓両者それぞれの累積出現名8を抽出。

○図・E、Fと図・H3から色名指針⑩～㉓の累積出現名5を抽出。

○図・Gから、初級時に認識の可能性ある青系統の和名6を抽出。

○表・5から色紙全色中での出現頻度の如何。

11名それぞれは、色相環上の青系統名範囲にムラなくばらまかれる(色相・彩度)。所属明度も高、中、低にわたるから基礎的な青系統色・名を選別する参考となるのではないか……。が、肝心の選別名数やコトバとしての適否は改めて考える必要がある。

表・6

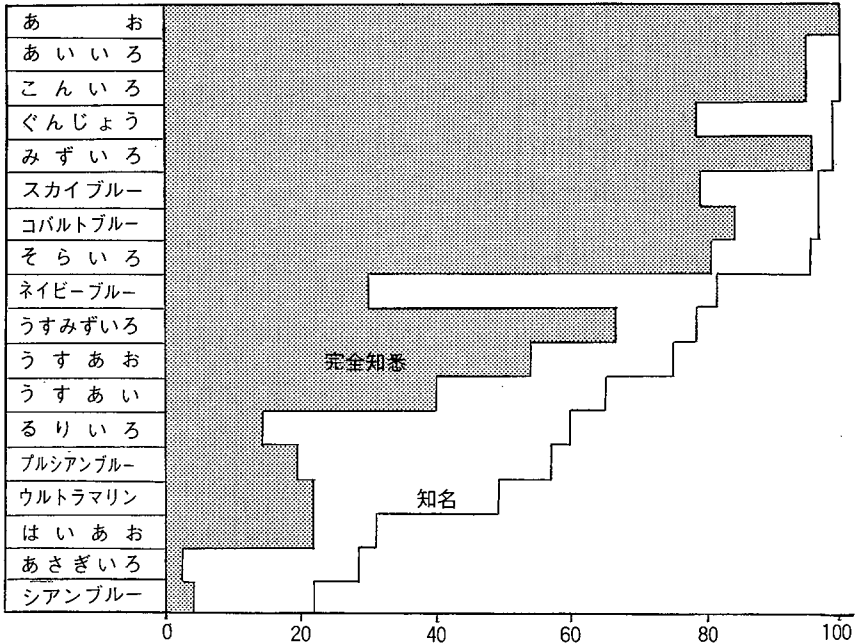
あ い いろ				○	やや小
あ お	○	○	○	○	大～中
あおむらさき		○		○	大～中
あさぎいろ	○				大～中
うす あ お		○		○	大～中
うすはなだいろ		○			やや小
うすみずいろ			○		極 小
こ ん いろ	○			○	大～中
そ ら いろ			○		やや小
み ず いろ	○		○	○	大～中
ふ じ いろ	○		○		大～中
色 名 資料	色紙① ③	色紙② ③ で累積出現	色名指針	初級段階で認識の可能性	色紙名としての出現頻度

2. 色名・その定着性

図・I のような調査結果を導入するが、これは女子短大生 100名を対象とする「緑系・青系の色名知悉度」の調査回答のうちの、あおの部分である。高学齢者の認識状況のみを、色名の定着性及びコトバとしての色名の適否を考える一助にしたい——と調べたもので、実施の概況は下記のとおりである。

青系統名	18	設問A	9以上（提示名の50%以上）を知っている人数——97名
			12以上（提示名の67%以上）を知っている人数——75名
			①この色名（ひらがな表示及びカナ表示＝主として前者のよみかえ外来名）を知っているか？
			②その名の実際色がすぐに、明瞭に想起できるか？

設問B { ③この色名 (①と同種。うち、漢字表示の可能なものは
それに置きかえ) の実際色がすぐに想起できるか?
④③が②で想起したのと同色の場合のみ○で回答



図・I

問の①②③④すべてに迷いのないイエスがあるのを完全知悉と仮称、図・Iでは、たんに知識としての (知名) と (完全知悉) の関連を示した。あおだけが、両者とも100%である。

これで見ると、あさぎいろの知名度は案外低く、完全知悉は知名のうち 7.1%で、その数値はぐっと小。あおよりコバルトブルーが劣り、あいいろ、こんいろに比べてプルシアンブルー、ネイビーブルーの完全知悉度はかなり下回る。ここでは想起する色・その実際色をつき合わせていないから、例えばぐんじょうとウルトラマリン、相異なる色を想起しているかもしれない。

ところで、前項の表・6は望ましい接触が想定されるものの中から抽出した11名であった。うすはなだいろのように児童・生徒向きではない色名も入っているが、基礎的な青系統名と指摘できる程の名が7～8名はあろう。そして表・6の名と、この図・Iを照合してみると、11名中、定着していく可能性の大きいものが諒察できる。即ち、18～19歳の年齢で知名度がごく高く、完全知悉度も90%を超える名は、もっと早い時期から色・名一致の認識をしていると察せられる。反対に、この年齢で知名度、完全知悉度ともに低位のものは色名への留意や啓蒙が伴わねば定着性は小と思われる。

ま と め

冒頭にあげた色紙名の調査のように、630余色の固有名となると、同類色異名が目立つ。多数色組になるほど色名の選定に無理が伴うようだ。それに接する以前に、基礎的な色・名をしっかりと掌握しておかぬと、名にふり回されることになりかねない。そういう実感が青系統色・名の調査に反映したのか、色名の整理の問題とか義務教育段階での色・名との接触ぶりを追う羽目になった。その学齢期は知識の吸収がよいし、色名一つにしても「よい名」を知れば、それは望ましい教養となっていくと考える。◆今日のコトバとして通用し、一般レベルでの定着性も大の名 ◆おぼえやすく、実際色が想起しやすい名 ◆分類的な名、慣用している名の混交はあっても、解りやすい固有名として受けとめられる名を「今日的な、よい名」だとも考える。その点、青系の色では「こん」がすぐれている。中国渡来の名だというし、我が国での愛用歴は古いにもかかわらず、今日なお生彩を失わぬ。語感、その他、ネイビーブルーなど足許にも寄せぬと感じている。今日の青系色名には常用語として外来名が多々入っている。一方では古代名のあとを引く名が満ちている。最近入手した専門書(福田氏¹⁵)にもそのことが触れてあって、現今の日本の色名は、昔製と最近製はあるものの、命名期としての中間が欠如。他方、西欧の色名では19～20世紀製が多い一

と語る。日本の青の固有名など、まさに前者の縮図といえよう。さらに同書では、青の名に関し、青は実体が稀薄であるし、外国のブルーは一層その傾向が強いともいう。厄介な色を相手にしたものだと、今思い、今日的な整理ができていないところを一人歩きしたようにも感じる。が、これから色名を知ろうとする人には、「よい名」を選別して伝えたい——という気持ちは変わらないし、色名認識を啓蒙する教育も必要と思うのである。他の教材品に比べて色数の揃えやすい色紙などは、そういう際の好材料になるはずである。色紙は色名帳ではないといわれそうであるが、基本的色組のように、幼少児・児童～生徒にまで使用される品種には、ことに「よい名」の案内役を期待するものである。中数色組以上のものは、色紙としての必要色・数と色名としての必要名・数を同列では考えぬ方がよいかもしれない。それが色名整理の一方途ともなる。なおこの調査は、多品種の多数名と接し、集約的なものを求めるという方法をとったから、みる角度は変わっても多出名が表面に出ることになった。よく検討すれば、稀少名より多出名が「よい名」だという断定はし難い。しかし、多出名の中に「基礎的で、よい名」が多いことだけは確かである。

◆注

- (1) 袋裏・インデックス・色紙裏などに表示。2名並記のものは条件統一して、和名欄の分をとった。
- (2) A群中の、おどいろ、はだいろ、ふじいろなどは、ここでの出現度数は小。
- (3) 2色相にまたがるもの、境界にあるものは、その色・名の動き方向をみて頭の方を重視決定した。例外として、平均的な位置選択や2色相にW配分したものがある。
- (4) 注3の2色相配分のものがあるため、この計上数は240、極小分では113。
- (5) 研究会の活動状況は、同会発行の「色彩教育」中の掲載文から引用。
- (6) S. 48年、日本色研内に色名調査研究準備会発足～色名研究会（有識者・14名が参画）発足・活動、のち、色彩教育研究会内の分科会に移管されて調査・研究を継続。

- (7) 良好な条件下で視感観測。
- (8) 上村六郎・山崎勝弘共著：S・25年・甲文社。S・51年・染織と生活社。三浦寛三著：色彩学概論増補版・創文社。
- (9) ISCC-NBS色名分類表，日本色彩研究所編：調査用カラーコード，カラーレンジ・マニュアル 100他を参考とした。
- (10) ⑪の場合は36.8%
- (11) これの色名は16色サンプル帳による。
- (12) 指針では，ふじいろ・あおむらさきは青紫系名としている。筆者がここに調査資料とした色紙では，両名の色が青系統名に所属すると判断したため，指針の両名も，本稿中ではその扱いとする。
- (13) このえのぐは日本製だが，色名表示は英綴りのみ。[k]セットではブルーコンボーズと表示。
- (14) 金・銀は有彩色名より除外した。
- (15) 福田邦夫著：赤橙黄緑青藍紫・青娥書房。

◆主要参考資料（注で既出の他）

- JIS標準色票，JIS Z 8721準拠——第7版（日本規格協会JIS色票委員会監修）
- CHM 1948年——第3版（Container Corporation of America）
- HUE CIRCLE100 1978年（日本色彩研究所発行）
- 学校用標準色票 1963年（色彩教育研究会監修）
- 市販の教材品各種。
- 色名事（辞）典・色名帳（日本色彩研究所，山田夏子，川原英介，太田昭雄，日本色彩株式会社，W.C.Granvill他）
- 色彩専門書・図工美術教育専門書。
- 筆者作製色彩資料。

1981年 8月31日